

『雨月物語』研究

——「夢窓の鯉魚」について——

岩 倉 三 奈

はじめに

『雨月物語』は上田秋成が著した全九編の怪奇小説集である。

秋成は和漢多くの書籍から原典とするものを求め、単一の材料にのみ拠ることなく各編を著している。しかし『雨月物語』は単なる諸作品に原拠を求めた翻訳小説にとどまらず、秋成の創作や知的技巧が駆使されており、原拠は十分に消化されている。

「夢窓の鯉魚」は『雨月物語』巻之二に収められている作品である。この作品は魚の絵を描いて入神の境に至っていた三井寺の僧興義が死後三日後にして蘇生し、鯉と化して琵琶湖を遊泳し、漁夫に捕えられて料理されようとするまでの体験を語るというストーリーである。この作品は直接に幽霊・怪異が登場していないためか、『雨月物語』に収められている他の作品と比べ読み終えた後に受ける衝撃に欠けるとされている。恐怖を抱かせない怪異が

描かれており、ほのぼのとした明るさまでも感じられる作品であるために『雨月物語』の中において他にそぐわぬ異質な作品として評価されている。^{注1}

確かに「夢窓の鯉魚」からはどろどろとした人間臭さがそれほど臭ってこない。しかしこの物語だけが童話的な明るさを持っているとすると、あれほど緻密に物語を構成した秋成が『雨月物語』の全体的統一性を欠くという過ちを犯したことになるがはたしてそのようなことをするだろうか。秋成が『雨月物語』に収めたということは、やはり他の作品と同様に人間の暗さが描かれている作品なのではないだろうか。

この論文では右のような問題意識に立脚し興義の人間像を浮き彫りにし、「夢窓の鯉魚」が持つ他の側面を照らしだすことを目的としている。

第一章では原拠との比較により、秋成の創作部分を明らかにす

る。オリジナル部分には秋成の意図が凝縮されているはずである。そこに表われている興義の人物像を考察していく。また、秋成は原拠の作風も作品に取り入れていると考えられ、原拠に表われている主人公と興義を比較することにより興義の内面に潜んでいた暗さを明らかにしていきたい。

第二章では興義が鯉と化して琵琶湖を遊泳する場面の持つ魅力について考察している。近代を代表する作家太宰治と三島由紀夫はともに遊泳場面に深く感銘をうけている。何故彼等が『雨月物語』の中で「夢応の鯉魚」の遊泳場面に影響をうけたのか。その理由を彼等の思想を紐解いていくことで解き明かしていきたい。

第三章では秋成の晩年に記された「自像笥記」から秋成の人生観を見ていくことにより、「夢応の鯉魚」の主題を考察していきたい。

第一章 原拠との比較

「夢応の鯉魚」の原拠については今までに色々に論じられてきたのだが今では『醒世恒言』の「薛録事魚服証仙」と『古今説海』の「魚服記」（宋代の説話集『太平広記』水族類の「薛偉」もほとんど同文。当時江戸中期の人々の間では翻訳の多かった「魚服記」の方がより親しまれていたと考えられる。）の両者であるという後

藤丹治氏の説が定説となっている。（「夢応の鯉魚の原拠」『国語国文』昭和二十七年九月号）後藤氏の論にならって「夢応の鯉魚」の原拠を「薛録事魚服証仙」と「魚服記」の二つであったとし、比較検討していきたい。

* 原拠から

「夢応の鯉魚」に取り入れられているモチーフを「魚服記」「薛録事魚服証仙」それぞれから抜き出すことによって、秋成のオリジナル部分を明確にし、二つの原拠の特色を見出すことにしたい。比較してみると「夢応の鯉魚」に取り込まれた内容は「魚服記」「薛録事魚服証仙」ともほぼ同じであった。しかし、「魚服記」は単なる奇談としての趣きが強い作品なのに対し「薛録事魚服証仙」は七夕神話や偉人伝説などの数多くのエピソードが収められた作品であり、奇談としての要素だけではなく不思議な脱俗した神聖な要素も加わっていることがわかった。その上「薛録事魚服証仙」での主人公の置かれている環境は、人の上にたつ責任ある仕事をしており、病に倒れても大切に看病してくれる人々に囲まれて生活をしているという点からも、興義の人物像はより「薛録事魚服証仙」にひきつけられて描かれていると考えられる。

これより「薛録事魚服証仙」から取り入れられたモチーフと興義とをひきつけて見ていくこととする。また取り入れられたモチ

「フが『夢窓の鯉魚』の作中のどこにあらわれているかを明らかにし、興義の人となりを導きだしていきたい。

只望着死裏求生。豈知他做夢的飄飄忽忽、無礙無拘、到也自苦中取樂。(ひたすら死の内に生を求めていた。するとどうしたことだろうか彼は夢の中で飄々と何の遮るものもなく、やすやすと苦しみのうちより樂を取り出したのである。^{注2})

ここで注目したのは「夢の中で」「苦しみのうちより樂を取り出した」という箇所である。興義も「眼を閉ぢ息絶えてむなしくな」り、夢の中で寺院から離れ魚と化し湖の中の遊泳を楽しんでいる。夢の世界が「樂」を表すものであり、興義にとっての「樂」は自由自在に泳ぎまわることであつた。そこには寺からの隔絶という側面も含まれていることを見逃してはならない。

嚇得少府心中勝大怒！便罵：『你這狗才！敢只會奉承裴五衙、全不怕我！難道我就沒擺布你處？』(驚いた少府は心中の怒りを押さえきれずに罵った。「この能なしめ！裴のやつにおもねって、俺をまるで恐れないとは。俺はもうお前を支配できないのか」)

興義も釣り上げられてしまい人々に「こはいかにするぞ」「旁等ハ興義をわすれ給ふか。宥させ給へ。寺にかへさせ給へ。」「仏弟子を害する例やある。我を助けよ^{注3}」と叫んでいる。魚と化して

いることを認識せず、僧侶としての肩書きを捨てられずにいるのである。ストレスの原因である僧侶としての生活でありながら、それを捨てられない、滑稽であるともいえる哀れな僧侶の姿が描かれている。僧侶であると自覚していた興義が何故謝罪の言葉を口にしたのか、疑問に感じる。この許しを乞う言葉は、寺からの隔絶を願っていたことに対する罪悪感から発せられたものなのであろう。

元來想極成夢、夢魂兒覺得如此、這身子依舊還在床上、怎去得？(思いつめた揚句が夢になり、夢の中で魂が、こんなふうに想ったままで、体の方は相変わらずベットの上に寝ていたわけで、出ていったのではなかったからである。)

ここには日常生活で主人公が自分でも気がつかないうちにストレスをかかこんでおり、その揚句魂だけが遊離していったということが描かれている。興義も同様に「絵に心を凝らして眠りをさそ」い、「夢の裏に江に入りて、大小の魚とともに遊」んでいる。思いつめた揚句の夢の世界が魚達との遊泳であつたということ、寺院での生活にストレスを感じていたということである。

城居水游、浮況異路。苟非所好、豈有通。爾青城縣主簿薛偉、家本吳人、官亦散局、樂清江之浩渺、放意而游、厭塵世之喧囂拂衣而去。(城の中と水の中とは、別の世界であるから、

両方を兼ねて住むことはできない。汝、青城県の主簿薛偉は、もと呉のもので、役も兼任にすぎない。清らかな江の水をひろびろとしたところを楽しみ、思いのままに遊び、人間世界のうるささをいとい、さっぱりとそこから逃れたい希望を抱いている。

主人公の立場が役人と僧侶とで違いがあるのだが、興義も似たような境遇であり、この言葉にあてはまっているといえる。興義も同様に思いのままに遊び、人間世界のうるささを厭い、さっぱりとそこからのがれたい願望を抱いていたのである。だからこそ魚の遊びに憧れ、魚と化してしまった時にも「あやしとは思はで尾を振り鰭を動かして心のまゝに逍遙」できたのである。

しかしここにはつきりと、寺の中と水の中とは別世界であり両方を兼ねて住むことはできない、という伏線がひかれている。興義の身に置き換えて考えると、ストレスを抱えながら寺の僧侶として生きるか、僧侶の肩書きが一切ない魚として自由に生きるかの選択となる。興義は結局魚として生きてはいけなことを痛感し、生きるために自由を放棄し寺での生活を選んでいる。

俗諺有云、不怕官、只怕管。豈是我管你不着、一些兒不你怕我？（俗なことわざにも、役所はこわくないが、支配されるのが怖いという。おれがお前を支配しないんで、少しもおれ

を、怖いと思わないのであろうか？）

ここは魚となった主人公がいくら抗議しても人々に聞き入れてもらえない場面である。興義も同様に自分より身分が低い者に普段からは考えられないような扱いを受けている。ここで興義は自由を得ることは僧侶としての肩書きを一切なくすことであり、自分はその肩書きがなければ何の力も持たない無力な生き物であると実感するのである。興義が気づいたのは、寺の中の生活から解放を希求していたが、自分はその中でしか生きてはいけないという悲しい事実であった。

以上に秋成が原拠の作風を取り入れたと考えて主人公と興義との共通項をみていった。これにより興義がストレスを抱える要因が明らかになった。優雅で何の不満も無い生活を送っているかに見える興義だが、内面にはどうしようもないほどのストレスを抱えて暮らしていたのである。

*秋成の創作

それぞれの原拠から「夢窓の鯉魚」に取り入れられた部分を明らかにすることで秋成のオリジナル部分を明らかにした。秋成のオリジナル部分は次の三箇所作品中にまとまってバランス良く挿入されていた。

・冒頭「むかし延長の頃、省略、天下に聞えけり。」

・遊泳場面「まづ長等の山おろしゝ省略ゝ千尋の底に遊ぶ。」

・巻末「興義これよりゝ省略ゝ古き物がたりに載せたり。」^{注3}

これらオリジナル部分には秋成の意図が凝縮されている文章であると考えて間違えない。詳しく見ていくことで興義の人物像を浮き彫りにしていきたい。

・冒頭部分

秋成は主人公興義の名を『古今著聞集』巻一画図一六の記述「成光、閑院の障子に鶏を書きたりけるを、実の鶏見て蹴るとな^{注4}ん。この成光は、三井寺の僧興義が弟子になん侍りける。」からとっている。「閑院の殿」とは京都にある里内裏の一つで、もと閑院左大臣藤原冬嗣の邸であったことからこの名がある。八十代高倉天皇から八九代後深草天皇の正元元年（一二五九年）五月に焼亡するまでの約九〇年間、閑院内裏と呼ばれていた。ここから興義は一一世紀頃の人物であったとわかるのであるが、秋成は「夢応の鯉魚」の中で時代を「延長の頃」（九二三〜九三〇年）と設定している。各作品の素材や典拠の調査を詳細に行ない、一つ一つの用語の端までにも気を配って作品を書き上げるた秋成がうっかり誤ったとは考えにくい。秋成は意図的に時代をずらしたとみるのが妥当であろう。秋成のねらった効果を考察していきたい。

「夢応の鯉魚」の舞台は三井寺である。一一世紀当時、天台宗

園城寺（三井寺）の寺門派と比叡山延暦寺の山門派との僧徒闘争が激しい時期であった。秋成は作品にこの状況はふさわしくないと考え、時代を権力闘争からかけ離れた延長の頃としたのだ。この時代は天皇政治の理想とされ、延喜の治と呼ばれている。のかで平和な時代という概念が強く働く時代といえる。「夢応の鯉魚」の下敷きとして興義は何の不安もなく、平和な時代に暮らしていたという設定にしておくことを必要としたのである。そうすることで興義が寺務の暇に湖に船を浮かべて絵を描き、なに不由の無い生活を送っていたと位置付けられる。そして、平和な時代であればあるほど興義の内面に抱えているストレスの暗さが深く濃いものになってくる。明かりがまぶしいほど陰の部分は濃くなるものである。秋成の狙いはここにあったのではないか。

・遊泳場面

興義が鯉と化して琵琶湖を周遊する場面は近世の修辞法を代表する名文として名高い。^{注5}琵琶湖を泳ぎ行く道行文の中に古歌から導きだした表現が多用されており、古歌の持つイメージを含み込んだ情景が創られている。また、近江八景までもが描き込まれており、ここで創りあげられた情景はまさに琵琶湖絶景の極地である。この遊泳場面の作品中の位置付けについては、第二章で詳しく述べることにする。

・巻末

秋成は興義が息を吹き返した後のエピソードを簡潔に記している。

其終焉に臨みて、画く所の鯉魚数枚をとりて湖に散らせば、画ける魚紙繭をはなれて水に遊戯す。

この一文から読者は興義の内面について推し量ることができ、興義の中に潜んでいる内面を見ていきたい。

まずは興義の魚の絵への異常なまでの執着心があげられる。興義は自分が死んだ後も人の手に渡らぬように自らの手で湖に投げ入れたのであろう。この鯉魚の絵に対する興義の執着心は魚の遊びをうらやむ心から発するものである。興義が日頃から魚の遊びをうらやんでいたことは物語の節々に表わされている。

寺務の間ある日は湖に小船をうかべて、網引釣する泉郎に銭を与へ、獲たる魚をもとの江に放ちて、其の魚の遊躍を見ては画きけるほどに、

興義は魚の絵を画く時、捕えた魚が自分の手から放たれて逃れ泳ぎ行く様を見て画いている。その行為には束縛から解放された姿への執着がみられる。興義自身解放願望を抱いているために、魚の解放され生き生きと水の中を泳ぐ姿に惹かれずにはおれないのだ。この他にも作品中に興義が自由を希求していることが表さ

れている。

或ときは絵に心を凝して眠りをさそへば、ゆめの裏に江に入りて、大小の魚とともに遊ぶ。

集中して眠りに落ちた時に見た夢が、魚とともに泳ぎまわるものであるということからも魚の遊びへの興義の執着がうかがえる。自由に泳ぎまわりたいという願いの裏をかえせば、今の生活はそうではない、自由ではないということになるであらう。

興義は一体何に縛られていたのであろうか。興義が息をひきとっている間に見た夢の中にその答えを見つけることができる。興義は夢の中でも始め病の熱に苦しんでいる。その苦しみから逃れるために興義がとった行動は、「門を出づ」ることであつた。すると興義は「病もやゝ忘れたるやう」になり、「籠の鳥の雲井にかへるこゝち」にまでになっている。それから寺からどんどんと遠ざかり、最終的に僧衣までも脱ぎ捨てる。始めは杖で歩くのがやっとの状態であつた興義が湖の中で水遊びをするまでに回復するのである。興義は段階的に寺からの隔絶をはかつており、そのつどに体の状態も改善している。ここから、興義は寺からの解放を求めていたことは明白であらう。彼のストレスの原因は寺での生活、僧侶として生きることであつたといえる。三井寺から望む町の風景は一つ上の視点から見下ろすものであつた。三井寺の僧興

義には多くの徒弟がおり、彼はかなりの身分の殿方をも呼びつけることのできる立場であった。普通の僧以上のプレッシャーを感じていたのではないだろうか。常に庶民の鏡として身を律しなければならず、自分自身の行動に気を配り続ける生活を送っていたのであろう。厳しい生活の連続、これにストレスを感じないわけがない。そのために興義は寺から解放されたいと欲していたのである。

第二章 後世への影響

秋成の創作部分である興義が鯉と化して琵琶湖を自由自在に泳ぎまわる遊泳場面は近世の修辞法を代表する名文と言われている。ここで描写されている琵琶湖の情景のすばらしさは前に示した通りである。

近代を代表する作家、太宰治と三島由紀夫はこの遊泳場面に深く感銘を受けている。どうやら秋成の創作した遊泳場面は単なる琵琶湖のすばらしい情景が描かれている場面ではなさそうである。彼等を深く共感させる魅力をあわせ持っているのだ。一体彼等を引き込む遊泳場面の持つ力とはなんだったのか。彼等の思想を見ていき明らかにしていきたい。

・太宰治

「魚服記に就て」

魚服記といふのは支那の古い書物にをさめられてゐる短かい物語の題ださうです。それを日本の上田秋成が翻訳して、題も夢応の鯉魚と改め、雨月物語巻の二に収録しました。

私はせつない生活をしてゐた期間にこの雨月物語を読みました。夢応の鯉魚は、三井寺の興義といふ鯉の画のうまい僧の、ひととせ大病にかかつて、その魂魄が金色の鯉となつて琵琶湖を心ゆくまで逍遙した、といふ話なのですが、私は之をよんで、魚になりたいと思ひました。魚になつて日頃私を辱しめ虐げてゐる人たちを笑つてやらうと考へました。

ここには太宰治が「夢応の鯉魚」の遊泳場面に深く感銘をうけたことがよく表われている。

「せつない生活」を送っていた昭和七年当時、太宰治はどのような状況にいたのであろうか。太宰治は昭和五年三月に弘前高等学校を卒業し、四月に東京帝国大学文学部の仏蘭西文学科へ入学している。前年に弟礼治を敗血症で失ったばかりであったのにその年の六月に三兄圭治も死んでしまふ。太宰にとって、自分を心から理解し、才能を愛してくれた兄弟達が次々と亡くなつてしまつたことはかなりの衝撃であつたに違いない。その上東京に上京してきたばかりで、天涯孤独の思いであつたのではないか。

そのような状況の中、太宰は二学期から学校へはほとんど行かなくなり、共産党の非合法運動に従事するようになる。本郷・小石川・下谷・神田辺りの学校全部の攻撃部隊長となって、武装蜂起と聞いては、小さいナイフを買い、それをポケットにいれてあちこちと飛廻って連絡をつけていた。また同士の宿や食事の世話を引受け、そのためにたびたび留置所に入れられていた。留置所から出るたびに友人達の言いつけに従って、別の土地へ移動する。昭和七年当時は早春に淀橋柏木、晩春には日本橋八丁堀へと転々とし、警察に呼ばれそうになつては逃げるという生活であつた。

このように太宰は当時愛する兄弟を失ひ心の支えのない状態の中警察から逃げ回り落ちつくことのない生活にあつた。共産党という枠に縛られ、自由のきかない生活にあつたために太宰は「夢応の鯉魚」の興義が自由自在に琵琶湖を泳ぎ周る姿にとりこまれてしまったのであろう。

太宰治は遊泳場面に影響をうけ、鬱屈した思いを消化するため「魚服記」という短編小説をものしたと考えられる。「魚服記」は父親と二人で寒村の中でもはずれに建てられた小屋に住む少女が孤独な閉ざされた環境の中で、ある日酔って帰ってきた父親に犯されてしまい、滝壺に投身し鮎に変身して水中を遊戯するという物語である。「魚服記」では少女は鮎と化すことで閉ざされた環

境の中から脱け出し父親から解放される構成となっている。これらのことから太宰治が魚となることで自由を得るといふ構想を「夢応の鯉魚」の遊泳場面から読みとつていたことが知られる。さて太宰治自身はどのような思想の持ち主だったのか。残されている随筆から解き明かしてみたい。太宰治は自分の生い立ちと環境を次のように述懐している。

私は殆ど他人には満足に口もきけないほどの弱い性格で、従つて生活力も零に近いと自覚して、幼少より今迄すごして来た。ですから私はむしろ厭世主義といつていゝやうなもので、余り生きることには張合ひを感じない。たゞもう一刻も早くこの生活の恐怖から逃げ出したい。この世の中からおさらばしたいといふやうなことばかり、子供の頃から考へてゐる質でした。（『文学の曠野に』「小説新潮」）

第一巻第三号、昭和二年一月号から）

また人生について端的に述べた文章が残されている。

人生とは、（私は確信を以て、それだけは言へるのであるが、苦しい場所である。生れて来たのが不幸の始まりである。）たゞ、人と争ふことであつて、その暇々に、私たちは、何かおいしいものを食べなければいけないのである。（『如是我聞』「新潮」）

第四五年第三号、昭和二十三年三月一日より

これらを見ると、太宰治は生きることの苦痛を感じており、常に生を放棄したいという気持ちを強く抱いていたことがわかる。

・三島由紀夫

「雨月物語について」

「夢窓の鯉魚」は人間の羈絆を脱して鯉に化した僧の目に映る絶美の自然を忍がいている。〔省略〕

この鯉魚の目には孤独で狂ほしい作家の目が憑いてゐるまいか。潮の水にその網膜の狂熱を冷やされて、一瞬の夢幻の倫安を許された魂が、ありのままに見た自然が展開するのである。魂の安息日が、この鯉の見た湖水のなかに息づいてゐるではないか。羈束をのがれた一個の生命が、深く透明な存在の奥底を、やすらかな愉樂をこめて覗き見る眼差が目に見えるやうではないか。

〔文芸往来〕昭和二十四年九月号

三島由紀夫も太宰治と同様に琵琶湖を周遊する興義の姿を「人間の羈絆を脱して」「羈束をのがれた一個の生命」の「一瞬の夢幻の倫安」と捉えていた。魚と化すことで興義は「魂の安息」を手に入れたと解釈している。

全く性格の異なった二人が同様に、遊泳場面を単なる琵琶湖の

絶景を描いた描写と捉えずに興義の解放の場面と捉えていることが興味深い。次に三島由紀夫の思想を見ていきたい。

三島由紀夫は少年期から青年期の間、戦争の渦中にあつた。戦争という死と隣り合わせの特異な状況は三島に強烈な影響を与えた。彼は異質な戦争観を持っていた。戦争が次第に破局の段階に入る頃の三島の述懐を見てみよう。

まず十八歳の私。

戦争も敗戦の兆をはっきりあらわしてきて、東京がいつ空襲されるかわからない時期である。〔中略〕

どうせ兵隊にとられて、近いうちに死んでしまうのである。それを想像すると時に快さで身がうずく。でもよく考えると死は怖いし、辛いことは性に合わず、教練だって小隊長にもなれない器だから、何とか兵役を免れないものと空想する。人並外れた空想力を持っているので、死ぬ直前に自分が僥倖によって救われて、スリルと安穩と両方を心ゆくまで味わえそうな予感がする。

〔十八歳と三四歳の肖像画〕

また当時のことをこう述べている。

・・・私は当時の現実を捨象することに一生けんめいで、もはや文学的交際も身近に絶え、できるだけ小さな、孤独な美

的趣味だけに熱中していたものと思われる。いずれは死ぬと思ひながら、命は惜しく、警報が鳴るたびに、そのまま寝て過ごす豪胆な友人もいるのに、いつも書きかけの原稿を抱えて、じめじめした防空壕の中へ逃げ込んだ。その穴から首をもたげて眺める、遠い大都市の空襲は美しかった。焰はさまざまな色に照り映え、高座郡の夜の平野の彼方、それは贅沢な死と破滅の大宴会の、遠い篝のあかりを望みみるかのようであつた。

（昭和三八年『私の遍歴時代』）

このほかにも「就職の心配もなければ、試験の心配さえなく、わずかながら食物も与えられ、未来に関して自分の責任の及ぶ範囲が皆無であるから、生活的に幸福であつたことはもちろん、文学的にも幸福であつた。」と述べている。

三島にとって戦争は決して単に辛く厳しい体験ではなかつた。むしろ幸せな時間であつたといえる。三島が戦争に幸福感を感じていたのは戦争は「未来に関して自分の責任の及ぶ範囲が皆無」で常に死と隣り合わせの非日常であつたからであらう。日常生活では「スリルと安穩と両方を心ゆくまで味わう」ことはできない。三島も就職や試験の心配もしなければならぬ日常生活を疎ましく感じ、非日常への強い憧れを抱いていた。平穩な日常に

付随する煩わしい社会的道徳に三島由紀夫はなじむことができなかったのだ。命は惜しくても防空壕の中から空襲を眺める三島由紀夫は、日常ではあり得ない世界に惹きつけられずにはいらなかったのであらう。

性格が異なつた二人が共に遊泳場面に魅せられたのは偶然ではない。二人とも現実逃避の願望を抱いており、異世界への移行を強く望んでいた。今いる状況からの脱出を強く願っており、危ない均衡を保って生活を送っていたのである。彼等にとってみれば遊泳場面はやすやすと日常を脱し異世界へ移行した者の描写と映り、その世界に引き込まれずにはいらなかったのであらう。自らの願望が見事に具現化された世界が遊泳場面にあつたのだ。彼等が遊泳場面に深く感銘を受けたのもうなずける。遊泳場面はやはり琵琶湖の美しい情景が表現されているだけの描写ではなかつた。現実世界を逃れ、夢を果たし自由を満喫する僧侶の姿が表現されていることも見落としてはならない。

第三章 主題

以上のように、興義は日常生活にストレスを感じており、常に解放願望を抱いていたことをみてきた。それを念頭に入れて作品を読んでみると「夢窓の鯉魚」を単なる奇談小説とだけ評価する

のは適當ではない。自由を希求しながらも死の間際まで終に果たされることのなかった悲しい僧侶の姿が描かれた作品なのである。また生きることへの秋成の問いかけも含まれているのではないだろうか。興義は釣り上げられ調理される時、ストレスを感じていたはずの現実世界へ帰ることを強く願っている。常に解放を望んでいたはずの興義は、生への執着のために辛く苦しい現実へ戻る決断を下したのである。二つの選択肢の中、太宰治、三島由紀夫は解放を、興義は生きることを選択した。そして太宰治、三島由紀夫は生を放棄し、秋成は興義と同様に天寿を全うしている。私なら生きる道を選ぶがあなたならどちらを選択するのか、という問いかけが含まれているのではないか。

秋成が死の前年に記した「自像管記」には秋成の人生観が残されている。

無腸生于浪華、客于京師一六年、無父不知其故、四歳母亦捨、有倅上田氏所養、歳六養母逝、性多病、時々発驚癇、後母依慈愛成長、歳卅七父逝、三十八係回禄失居、始於是京攝之間移宅凡十余度、每地在神如迎似逐、生活商戸、破産一為医、患疾不立業、泊然廿年、其間玩好国文国詩、不以為業、歳五十七頓失左明、六十五僥倖迎神医得左明、又及右眼、後母給仕五十三年、亡妻糟糠卅八年、今歳七十伍、嗟呼天為何

生我耶。^{注6}

ここには秋成が歩んできた苦難の人生が克明に記されている。生みの親に捨てられ、養ってくれた上田家は破産し、養父母にも先立たれてしまふ。天災で家を失い、身体的にも恵まれなかった。なによりも自分は生きてきた中で人に何の報いもししておらず、一体今までの人生は何だったのか。秋成の問いかけ「嗟呼天為何生我耶」には生きるとはこれほどつらく苦しいものなのに、なぜ生まれてきたのであろうかといった気持ちが込められているのである。生きる意味とは一体何なのだろうか。そのわだかまった思いを消化するため秋成はこの作品を描いたと考えられる。作品の中で秋成は興義に辛い現実を生きることを選択させている。秋成は「夢窓の鯉魚」を描くことで多少なりとも生きることへの意味を見出すことができたのであろうか。秋成は物語をものすことで鬱屈した思いを消化しており、興義は絵を描くことで消化していたということなのであろう。

この作品を読むと興義の歩んだ人生が幸せなものであったとは考えにくい。それも秋成の人生に対する実感が表われているためである。秋成のこのメッセージを生きることの苦しみを感じていた太宰治と三島由紀夫は読み取ったのだ。周知の通り彼らは自殺して最期を遂げている。二人とも現実世界へは戻らずにいること

を選択したのである。

おわりに

興義の人物像を見ていくことで「夢応の鯉魚」の持つ異なった側面を読み取ることができた。鯉と化して泳ぎまわる尋常ではない興義の姿をみると、いかに彼が自由を渴望していたのかと感じずにはいられない。果たされたかにみえた興義の望みも結局は一瞬の儚い夢に終っており、興義の失望はかなりのものだったにちがいない。手には入らない自由を味わうということは残酷なしうちではないか。それほど死への誘惑は強いということなのである。その誘惑に打ち勝つには強靱な精神を要したに違いない。

「夢応の鯉魚」には多くの側面が含まれている。どの側面を読み取るかは読者の置かれている状況による。生きることの辛さを感じている者ならば興義を自分と置き換えて読み、遊泳場面で一瞬の安楽を味わうことであろう。また何の不満も抱いていない者にとっては僧侶の不思議な体験談、面白い読み物として読めるのであろう。

一見僧侶の不思議な体験談として読める小説なのだが、裏には秋成の人生の洞察も含まれているのである。人を深く共感させる力、思いを消化させる力、物語には読み物として楽しむ以外にも

様々な力があるのだと気づかされる。「夢応の鯉魚」にこんなにも様々な側面が含まれているということは驚くべきことであった。

注

注1 浅野三平氏は「夢応の鯉魚」の持つ明るさについて『上田秋成の研究』（桜楓社、一九八五年）で『雨月物語』所収の他の作品と時日を隔てて書かれたためと論じておられる。また井上泰至氏は『雨月物語―源泉と主題―』（笠間書院、一九九九年）で魚となって切られる悲惨な印象を読者に与えないための秋成の工夫と論じておられる。両者に対し植田一夫氏は『雨月物語の研究』（桜楓社、一九八八年）で明るい作品と捉えるのではなく他の諸編との関連性において「夢応の鯉魚」の新たな位置付けを必要とする問題と論じておられる。

注2 以下「薛録魚服証仙」の訳文は『全譯中國文學大系第一集第十一卷醒世恒言（三）』（辛島驍、東洋文化協會、一九五八年）によっている。

注3 以下『雨月物語』からの引用は水野稔『雨月物語 校注古典叢書』明治書院によっている。

注4 『日本古典文学大系八四』（岩波書店、一九七八年）

注5 秋成は遊泳場面で枕詞や縁語を効果的に使っている。古歌の語のもっているイメージを含みこんだ情景とともに、興義の眼を通してみた情景が「長等の山」「志賀の大湾」「沖津嶋山、竹生島」と枕詞をつ

ないだ叙述で描かれることによって見事に琵琶湖の風光となっている。またそれだけでなく琵琶湖西南部附近八箇所の優れた景色である「近江八景」(比良の暮雪・矢橋の帰帆・石山の秋月・瀬田の夕照・三井の晚鐘・堅田の落雁・栗津の晴嵐・唐崎の夜雨)までもが効果的に描きこまれている。

注6 『秋成遺文』(国書刊行会) 四九八頁

付記 この論文は卒業論文をもとにしたものである。

(いわくら みな 二〇〇一年日文卒)